書評

池上俊一著『ロマネスク世界論』

江川　温

これは勇敢な挑戦の書物である。本書のすべての長所といくらかの欠陥を論ずるに先だってそのことを認めなければならない。この書物に対してはさまざまの反論が提起されうるであろうが、それは著者が自身の主観を大胆に提示しているからである。論述は必ずしも実証的ではない。著者自身、さまざまな事象の「背後から立ち上るアウラのようなものを想像の眼で見据える」ことを何よりも重視しているのである。危うさを感じないわけではない。しかし本書を読んで、歴史を語ることは根底において信念の行為であることを改めて認識させられるのである。

「はじめに」においては、本書の主題がロマネスク期のヨーロッパの「心的世界」の本質と構造であると述べられる。すなわちおおよそ一〇世紀末から一二世紀前半のヨーロッパの精神的様相の全体が解明さるべき主題となる。著者によれば、ヨーロッパ史においては特有の「心的世界」を有する時代社会が継起しているのであり、各時代におけるもろもろの人間活動はその心的世界の外的、象徴的表現なのである。そしてロマネスク期はヨーロッパがはじめてヨーロッパとなった時期であり、特別の重要性を帯びているとする。ただちに推測されることであるが、著者は樺山紘一氏が印象的な形で提示した「ゴシック世界」を強く意識し、これにさまざまな点で対峙するものとして「ロマネスク世界」を打ち出しているといえよう。

第一章は方法の問題を扱う。著者は全体史への志向を語り、それを可能にするのは、もろもろの出来事や作品から集合的な心の領域＝心的世界を再構成していくことであるとする。ここで著者は再構成の原理として四つのシェーマを打ち出す。①心的世界は歴史的産物であり、時代や地域に応じた意識と無意識を包含する。②こころには感覚・感情・思考・想像・霊性といった諸機能があり、それぞれのやり方で自己を表現する。③個人の心と集団のこころは、相互に包蔵関係にある。④心的世界と社会的現実は相即し、たがいに照らし合う。これは心ないし文化と、政治、経済、社会的事象との関連についての議論であるが、著者は象徴的・隠喩的連関を基礎に、構造的・有機的連関、技術的・因果的連関をも加えた包括的把握を志向するとする。

ここでの問題点を挙げるならば、第一に「心的世界」が著しく斉一的で安定的なものに見えることである。方法を原理的に考察する以上、心的世界の変化とその動因についても論じるべきではないか。第二に、著者も別の場所で認めているように、文化事象のみならず、政治、経済、社会の事象もまた人間の活動として「心的世界」の刻印を受けていると言える。しかし本章ではこれ

らを「物質的世界」に一括して「心的世界」に対峙させるような議論が見られ、気にかかる。

第二章はプレ＝ロマネスクと題し、ロマネスク世界の前提となった諸文化伝統の初期中世における発展を扱う。まず〈ギリシャ＝ローマの理知〉が取り上げられ、カロリング・ルネサンスの果たした役割やラテン語の活力が指摘される。次に〈キリスト教の霊性〉が論じられるが、ここでもカロリング期の達成が高く評価される。ついで著者は〈ケルトの夢想〉と〈ゲルマンの習俗〉を重要な要素として取り上げる。さらに文化発展の社会的基盤として、メロヴィング期からの一貫した経済発展、普遍支配の理念の定着、修道制の展開、家族・親族組織の変容が触れられる。最後に著者はなぜ一〇世紀末にロマネスク世界が生まれたかを問い、紀元千年前後の飛躍を推定する。なお五〇頁の八行以下では年代の記述に誤りがある。

第三章は芸術的認識からロマネスク世界に接近する。まず建築が取り上げられる。「空間の韻律法」「象徴と合理の結合」といった形容に加えて、ラディングおよびクラークが立てたモジュール説が紹介され、一定の単位のリズミカルな反復がこの様式を特徴づけるとする。次に建築に付属した彫刻に触れ、ここでも厳密な枠構造と奔放な想像力から生まれる一定のリズムを認める。ついでこの時期の典礼音楽が論じられるが、なによりもそれを特徴づけるのはオルガヌムと呼ばれるポリフォニー構成であり、そこでは一定の音域に限られた分節のリズミカルな反復が認められるとする。

続いて文学をめぐる議論が行なわれる。まずこの時期のラテン叙情詩は古典的な長短音節の配置規範を脱し、リズムと韻を発達させたとする。武勲詩については、それがジョングルールと聴衆の間で初めて現実化する「潜在性の文学」であり、レスやフォルミュールの技法によるリズムと韻律がストーリーの提示に不可欠の役割を果たしていることを述べる。トルヴァドゥールの抒情詩についてもリズムと韻律の重要性、「潜在性の文学」としての流動的性格、共同体の心情に基礎を置くことによる内容の定型性を指摘する。そして一二世紀以前の文学もまた単位要素の反復とリズムを特性とするが、それはこの文学が民衆とエリートの合作だからであると結論する。

この章では著者の該博な知識に圧倒される。しかし芸術諸ジャンルの概観から「単位」と「リズム」の役割の共通性を導出し、これをロマネスク期の特質とする議論はいささか性急である。音楽や文学作品における基礎的なまとまりと建築のモジュールを通底させる議論は、評者には十分に納得できなかった。また民衆とエリートの対置は文学に関して初めて明確に提示されるのであるが、異教とキリスト教、北方文化と地中海文化といった対置関係にそのまま重ね合わされ、結局芸術諸分野にすべて両者の合作が見いだされることになる。この議論の組み立てもやや安易な印象を免れない。

第四章は思想＝知的認識を論ずるが、前提として知的エリートと民衆の関係が巧みな比喩で示される。知的活動は心的世界という大山の頂点に当たり、もっぱら前者によって担われたが、その外縁部ではエリートと民衆に共有される〈想像〉の沃野に連続しているというのである。ロマネスク思想の主要論題としてはまず

宇宙・自然論が取り上げられる。著者はドイツ系の思想家の夢想的な宇宙・自然論、およびシャルトル学派の寓意とメタファーによるそれを概観し、一二世紀の思想家が人間の自然理解の能力を認めていたことを強調する。ついで政治・社会論を扱い、ソールズベリのヨハネス、ライヒェスベルクのゲルホフス、フライジングのオットーらが、教会と国家を分離することなく世俗社会をそれとしてポジティヴに評価した点にロマネスク期の特徴を見いだす。

次に歴史思想・歴史叙述が考察の対象となる。著者によれば、一二世紀には地理的パースペクティヴや時代区分の意識が発展し、人類史の積極的評価と段階的発展史観の形成が見られた。そしてこうした構成を支えたのはイメージやメタファーであった。実際の歴史叙述は分節化したエピソードの連続に他ならないが、ロマネスク文学のように受け手が想像力によってエピソードを組み立て、統一的命題を発見するものであったとする。また聖体と三位一体に関わる思考と論争を取り上げ、それらがイマーゴ、徴といった概念と文法（弁証法）に依拠して展開されたこと、イマーゴは倫理主義的志向の中で設定されていたことを指摘する。

著者はさらにこの時期の思弁のキー概念としてfabula（寓話、寓意）、integumentum（真理の包彩、隠された真理）、imago（像）、similitudo（類似）を取り上げ、解説する。前二者は異教的古典の知をキリスト教と折り合わせるために、後二者はキリスト教教義の根幹を論理的に把握するために活用された。そして著者は、ロマネスクの思想はイマーゴに依拠する「想像的理性」によって導かれており、詩的ファンタジーが科学やメタフィジックと結びついていたとする。見事な見取り図である。

第五章は感覚・知覚を扱う。著者は五官の機能の様式や評価は文化・社会の仕組みと密接に関わり合うという命題を前提として、ロマネスク世界固有の感覚のあり方を探るのである。まず聖者崇敬における聖遺物との接触、禁欲的宗教運動における苦行、神明裁判、武勲詩の戦闘描写は触覚がとりわけ重視されたことを示している。またこれに次いで重要であるのが聴覚である。朗唱、儀式的叫喚や歓呼、戦闘における鬨の声など公的な場での発声はとりわけ大きな機能を有していた。ロマネスク期はズムトールのいう「混成口頭性」の時代であり、文学においても法行為においても文字は声の補完物に過ぎなかった。議論はさらに身体と記憶の問題に進む。ます身体と身振りの重要性、またそれと触覚、聴覚との関連が論じられ、ついで記憶の重視およびそれを支える声、文字、身振り、接触、すなわち聴覚、視覚、触覚の役割が説明される。

この章も著者の豊かな感性を示しており、たいへん示唆に富む。しかしロマネスク期の触覚や聴覚について述べられることは、ほとんどそのまま中世前期にも当てはまるように思える。著者も、紀元千年以前には別の感覚が重要な機能を担っていたという仮説を持っているわけではないだろう。確かに聖者崇敬の拡大はロマネスク期の現象であるが、それが触覚の優位をもたらすわけではない。

同様の問題は文学書や歴史書を素材として感情を扱う第六章にも見られる。著者はロマネスク期の人間は情動性の激しさが際だっていると述べ、とりわけ「恐怖と苦悩」「愛と憎悪」という二

組の感情が時代を特徴づけているとする。その上で著者はロマネスク期の感情世界を、情動の激しさ、感情の伝染性、公開性と儀式性、激しい感情の発露が集団全体に力として作用する「超越的様式」について考察する。そしてこのような感情表現は、〈民衆〉共同体のあるべき秩序の観念に接合することでその妥当性を確保しているとの、注目すべき見解を述べている。

これらの議論は、確かに一一、一二世紀の社会に妥当するであろう。しかしながらそれは本当にロマネスク期の特徴を摘出しているのであろうか。ホイジンガの『中世の秋』の冒頭の章は、中世末期における人びとの感情の激しやすさ、集団による感情の共有を生き生きと描いている。評者にはこのような性向はヨーロッパの心性の古層に属し、前近代を通じて繰り返し表現されたもののように思える。

第七章は宗教的志向としての霊性を論ずる。まずエリートの霊性としてクリュニーをはじめとするベネディクト修道制、シトー会、聖堂参事会運動が概説され、聖ベルナルドゥスほか師父と目される人びとの宗教思想がスケッチされる。次に著者は民衆の霊性を、巡礼運動、「神の平和」運動、初期十字軍、異端運動、教会建築運動などを素材として検討し、〈清貧〉〈禁欲主義〉〈贖罪〉〈キリストへの帰依〉〈終末観〉などの要素を抽出する。そして民衆の霊性に見られた傾向をラディカルに突き詰め、自らの生き方に反映させていった集団として隠修士を位置づける。そして思考を支えに世界を統一的に把握しようとする〈エリート〉と感情に真実を求める〈民衆〉の霊性は、ある面ではでは対立しつつ、他面では交流して相互に影響を与え、根底においては共通の性格を帯びているとする。

問題点を挙げるならば、巡礼運動以下の各運動において、〈民衆〉の霊性の自律性がいささか安易に前提されていることである。民衆の動きの中に神の意志が顕現するというのは、叙述史料のトポスであり、現実には教会人の主導が明らかなことも多い。評者が検討を続けている「神の平和」運動についていえば、これは全体として教会人の指導と統制の下にあり、この教会人の中に、平和熱狂と地域社会の秩序維持のための実際的な戦略への志向が共存していたように思われる。またこれとは別に、著者が民衆の霊性対教会権力という図式を強調するために、エリートが教会の体制派と結果的に重なってしまうという問題がある。実際にはエリートの中にもさまざまな志向があった。たとえば隠修士は民衆であるのかエリートであるのか。反体制あるいは脱体制エリートの存在をシェーマに組み込むならば、民衆の霊性の自律性についてもさらなる検討が必要となるだろう。

第八章は想像界を扱い、思考と感性の共通の基層であるイメージの群れの考察から始まる。まず〈身体〉と〈森〉は自然のメタファーとして、〈猿〉、〈狼男〉、〈野人・野女〉は自然との関わりの中で生じる想念を託された疑似人間として、重層的な意味を負っていることが指摘される。次に異界としての〈天国〉、〈地獄〉、〈煉獄〉、〈地上楽園〉と幻視によるその巡歴譚、異界の住人である〈天使〉と〈悪魔〉が扱われ、現世と異界の分かち難い混融、この世への超自然の浸透が導かれる。また〈女性〉イメージに関わる問題――女性の嫌悪・蔑視、マグダラのマリア信仰、文学における妖精――、〈農民〉および〈黒人〉のイメージが概観され

る。ついで生活空間に関するイメージとして〈宮廷・城〉とその〈庭〉、〈修道院〉、教会組織や聖堂を表現する〈(ノアの)舟〉や〈キリストの体軀〉、天上のエルサレムと地上の集住地が重層する〈都市〉などが順次とりあげられる。さらに諸イメージの源泉でもある〈夢〉、〈顕現〉、〈幻視〉が論じられる。

著者はこれに続けて、ロマネスク期の想像界の構造を考察し、善にも悪にも属さない〈驚異〉の世界の拡大によるイメージの豊饒化、文化と自然の不即不離、現世と異界の連続性、イメージの論理的操作などを指摘するとともに、政治的分権化にも拘わらず想像界では普遍的・統一的社会像が先取りされていたことを強調する。さらに想像界の発展にはエリートと民衆の協働があったこと、諸イメージを貫いて人間の善性への信頼があったことを指摘する。評者の疑問点をひとつ提出するならば、イスラム教徒、ユダヤ教徒のイメージについてほとんど論じられないのはなぜだろうか。

第九章は「心と現実」と題し、まずこれまでの議論が簡潔に整理されるとともに、心的世界の諸局面の関連が改めて強調されている。たとえばロマネスク期の感覚の特徴である触覚と聴覚の重視は、身体、間身体に響くリズムに基礎を置く芸術的認識とつながっている。また想像は思考と感情の橋渡しをするが、この双方から滋養を得て存続・発展するものでもある。ロマネスク期の情動の激しさが生き生きとしたイメージを想像界に育成したのであり、知的認識はこうしたイメージをメタファーとして駆使しつつ、対立物を昇華させるような融通性を持ち得た。そして中世前期に習俗や儀礼や迷信の要素であったイメージはロマネスク期にヨーロッパ規模で攪拌、醸成されてその共有財産となったとする。

次に著者はエリートと民衆の概念について解説する。民衆文化・宗教についての研究史を手際よくまとめた後、著者は、民衆とは〈感情〉に自己の活動の意味と真理の根拠を見いだす者たちであり、エリートとは〈思考〉にそれらを求める者たちであると定義する。

議論はさらに政治、経済、社会関係といった「社会的現実」と心的世界の関係に進むが、ここで著者の一一、一二世紀社会論が凝縮した形で展開される。まず自然環境と物質文明、ついで家族・親族関係が扱われる。また社会体制については、城主支配体制の成立を素描した後、「事実上の封建制」と「法的封建制」という注目すべき概念を設定し、前者がまず支配の概念として地中海沿岸に生まれ、それが北ヨーロッパで王侯の統一的支配の理念に吸収され法的に整理されて後者になったという見通しを立てる。そして一一、一二世紀に一般的であった「事実としての封建制」にあっては、城主層の優位は認めうるものの、領主間の水平的ネットワーク関係も劣らず重要であり、総体としてゆるやかな秩序が保たれていたとする。さらに農民、教会、都市の状況がおおよそ通説に沿って解説される。

ここで社会的現実とは心的世界の隠喩であり、社会の仕組みといっても人々のヴィジョン、表象が間主観的構造をとったものに他ならないという重要な主張が述べられる。文化と社会はともに心的世界の現象形態であるというのである。しかし他方では社会的現実の変化に伴って心的世界が変容していくことも認められている。著者は、人口の増大、自然の開発、流通と交流の活発化、

社会的ブラウン運動、貨幣経済の浸透、公的秩序の解体とコンパクトな領域支配の成立、柔軟な「友愛と約定の秩序」の一般化が、ロマネスク期の心的世界をさまざまな仕方で規定しているとする。社会と文化は相互に相手を条件付け、相互に浸透していくのである。著者はさらにエリートと民衆の実体に言及する。前者は修道士や聖職者のほかに場合によっては王侯貴族や都市民上層の一部を含む。後者は農民、都市民、騎士、貴族の大部分である。またこの両者を仲介する場と存在として、宮廷とその礼拝堂付司祭、広場や四辻とジョングルールや隠修士の役割についても触れられる。

むすびは「ロマネスクからゴシックへ」と題し、知的認識と芸術的認識に限ってゴシック世界の特徴を述べ、ロマネスク世界のそれと対比する。さらにロマネスクとゴシックをヨーロッパ文明の二つの脚と位置づけ、以後のヨーロッパの文化運動をこの両原理の変奏とみる展望を打ち出す。ここで評者が抱いた最大の疑問は、両世界が対比においてのみ語られ、一方から他方への移行を促す力について、推論であれ何であれほとんど言及がないことである。ロマネスク世界を成り立たしめた社会的諸力については詳しい説明があるだけに、この沈黙は奇妙である。

以上、この大著の内容を簡単に要約し、批判や疑問を述べてきた。おそらく最大の難点は、心的世界がなぜ変化していくのか、社会的現実の変動は心的世界の変化にどのような役割を果たすのかという問題について、著者の思考が必ずしもまとまっていないことである。方法を論じた第一章の問題点が「むすび」での欠落に結果しているといえば言い過ぎであろうか。しかし、この問題について著者を責め立てても仕方あるまい。評者にも提示できるような格別のアイディアはない。この問題は心性と社会の関連で歴史を考える者すべてにこれからも課せられ続ける。

文章表現については、多少の違和感を禁じ得なかった。「ロマネスク期に、落ち着いた中にも磨かれた貴石のような不思議な輝きを含む雰囲気を醸しだした大本となる霊性は〈エリート〉の霊性よりも、むしろこちらのいとも清新な〈民衆〉の霊性であったというべきではないだろうか」（二九七頁）。こうした対象への感情移入と超越的評価は、非常に古い時期の文化史叙述を思わせる。意味不明瞭の文章もわずかながらあった（四三七ページ六～八行）。

さまざまな問題点にも拘わらず、評者は著者の構想にかなり説得された。一一、一二世紀の心性と文化についての諸研究を一貫した構想のもとに評価し組み立てた全体史として、この書物は研究史上に長く記憶されるだろう。また著者の豊かな感受性と博識がこの書物を魅力的なものにしている。誤読の点は多々あろうが、寛恕とともにご指摘いただきたい。

（A5判　四七三頁　索引・註一〇五頁
一九九九年九月　名古屋大学出版会　六五〇〇円）

（大阪大学大学院文学研究科教授　　）